

○日野伊久子， 谷井淑子

（昭和女大）

目的：前報では、アイヌ衣服63点の調査資料の中からアツシ5点を対象に、衣服の構成、寸法、縫製技術について実測調査結果を報告した。今回は、木綿衣にみられる特徴的な部位として襠を取り上げ、形状、寸法、縫製について実測調査の結果を報告する。

方法：調査資料の木綿衣の中で襠付き衣服40点について、襠の形状を分類し構成特徴を記録する。寸法については襠部位の実測値を求める。縫製調査は縫合部、始末法の手法、縫い糸の種類や針目数（5cmを単位とした針目数）について観察し巧緻性を判断する。

結果：アイヌ衣服の木綿衣の資料の一部に襠付き衣服がある。これらの襠布の付け位置は、袖付けの一部から裾まで、袖下から裾まで、肩山から裾までの三種類に大別できる。形状は、短冊形、台形、楔形などがある。襠は、身幅の不足分を補い、装飾文様の一部として、また、衣服を大きく表現する手段としての役割があることを窺い知ることができる。寸法は、着用者によって様々であるが、襠幅の最大値は、襠上で11.0cm、裾口で20.2cm。最小値は、襠上で1.5cm、裾口で4.0cmである。襠丈は身丈と同寸法から、袖下から裾までの短い丈の資料まで個々に異なる。縫製は、全て手縫いである。並縫い、かがり縫い、伏せ縫い、一目落としなどの手法が観察された。縫製については和服仕立てのような特定のきまりはないが、資料間に技術の巧拙がみられた。